

水田さんへ

水田さんへ

創刊号の「私の非暴力」に賛成の
ところも反対のところもある。

どういふところが賛成かという
自分の中であつて自分でも気づいて
いない力を探り出すのが自分の非暴
力直接行動の方法だという結語の部
分は、まったく同感だった。僕自身
そうなっているかどうかは別として
わが意を得たりという気持がしたわ
けです。

それからまた、こういうことを言
われると口舌の徒である僕なんか身
の縮む思いなんだけれども、現在の

日本の非暴力直接行動が無力である
ということ、またそれが何もしない
言い訳になりがちだということも、
やはり認めざるを得ないだろうなと
思ふんです。

思ふんですが、それと対比して「
反日武装戦線」には闘う意志があり
アジアの国々の人民からみれば、日
本人は総体として殺してもあきたら
ない敵と見えるだろう、そういう視
点を持たなければいけない、という
ところになると、そうすんなりと同
感できない。闘う意志だということ
だけで言えば「オオカミたち」も内
ゲバと闘っているセクトの人たちも
同じような強い「闘う意志」を持っ
てやっているのであつて、両者を区
別することはできないのではないか。
人民のために、プロレタリアート

のために闘っているという意図の方
向も同じだと思ふのです。僕が知っ
ているかぎりでの水田さんの生活ス
タイル、価値観からすると、水田さ
んの「オオカミたち」擁護は自分自
身の感性を押し殺した主張のように
見える。何だかひどく無理をして肩
ヒジ張っているように感じられる。

水田さんの文章と同じ標題の「私
の非暴力」の中でガンジーは、妻子
を置きざりにして逃げ出した国民会
議派の党員を非難して、「彼らはヒ
レッツにも非暴力をその口実にして
いるが、私の非暴力は暴力のことを考
えるいとまもなく、妻や子供を守る
ために闘った者たちの振った暴力と
私の非暴力は完全に一致する」とい
ふ意味のことを言っており、僕はこ
ういうガンジーの矛盾した言葉に強

くひかれるのだけれど、この構図を力のない日本の非暴力直接行動と「オオカミたち」の爆弾闘争にあてはめることは無理があると思う。

行動の原動力は直観の明サイさの中にあるので、いくつもの弁証を経なければ到達できない感情移入というものを僕はあまり信用していません。（だからこそガンジの矛盾がよけい強い力を僕には持っている。）

アジア人民の目から見れば日本人は（自分をふくめて）皆死んでしかるべき人間であるという認識と（僕はそう考えないのだけれど）「オオカミたち」が狙ったのは日本の国家と企業だったという主張はまったく別の事柄で、互いに論証しあう関係には立っていないのに水田さんの文章ではその二つが互いに他を正当化

するものとして論じられているように思います。この点についてはまた機会をあらためて話し合う時もあると思います。

第二便

今度の水田さんの手紙に書いてあることで、どうも僕の言ったことが誤解されてるんじゃないかと思うことを書きます。

その一つはガンジのことで、僕はガンジが優れた思想家だったと思っています。直観だけでなくその直観を深い思索によって思想にまで築き上げた人だと思えますし、だからこそ強い力を持ったのだと思えます。僕が弁証というのはそういうことと少し違う事柄なのです。

例えば「平和憲法は平和を希う人

民の力が生み出したものだ」ということがよく言われたけれど、そしてたしかに平和憲法は僕たちの理念にそって、生かし得るし生かすべきものだとは思いますが、事実として言えば「人民の力」によって自分たちが生み出したものであるとは言えないそれを「人民の力が生み出した」と言うのはこれは弁証だ。事実の中に直観としてとらえられないものを、ある前提を貫く必要上、論理の迂廻路を作ってつなげていくものだ。そういう意味で、これは弁証だというわけなんです。

ガンジの例にもどれば、あの言葉は言葉としてみるならば明らかに矛盾していると僕は考えざるを得ません。それを矛盾すると思わずに言ったのは、ガンジの中に言葉の矛

盾を通じて一貫する思想、直観というものがあつたからなので、その言葉の矛盾を一つにつなげる思想を問題にしなればガンジーを読む意味がない、と、僕はそう言いたいわけです。

前後相矛盾する言葉なんて優れた思想家の中にいくらでも例のあることで、ルソーだって、マルクスだって、レーニンだってみんなそうです。論理ばかり一貫していてもさっぱり思想の豊かさを感じさせてくれない

大学教授のような場合もうじやうじやいる。僕がすぐれた概念構成とすぐれた思想とは全く別の事柄だと書いたのはそういう意味のつもりでした。

たゞ別の事柄だと言っても何かを分析しようとするなら、その分析が

明せきなものであるためにはすぐれた概念構成がどうしても必要になつてくると思います。

第二番目は「たゞの市民」ということ。僕は「たゞの市民」というようなことを一度もしゃべったことも書いたこともないつもりです。労働者がいて学生がいて「たゞの市民」がいて：というような意味での「市民」というのは、それこそ概念としても実体としてもあまり意味がないと思います。

「市民」とか「市民原理」とかいふ言葉に僕はどうもうさん臭さを感じてしまうのですけれど、しかし僕自身はセクトでやっている昔の仲間なんかゝらは「市民派」に転向した人間だと見られているらしい。その理由を自分なりに考えてみると、そ

れは多分、僕が「労働者」対「資本家」という階級原理だけでは「労働者」自身の問題さえ解決できないと考えるようになったからで、そのことはソ連「社会主義」が抑圧的な社会を作り出してしまったことだけを見てはつきりとしている。従つてこの階級原理だけによつてスターリズムを批判しようとしても始めから無理があると僕は思う。僕が知りたいたのは抑圧を排除する方向に働く人間関係を作り出す原理はどういうものかということで、その原理は「労働者」も「学生」も「たゞの市民」にかいふものをも貫いて普遍的に存在するものであるという考え方をとります。そういう視点から「オオカミたち」の行き方に反対なわけですから、そういう考え方を「市民原理」と

いうのだったら、僕は市民主義者と呼ばれてもいっこうに差しつかえない。

昔、六十年安保の頃に大沢さんが「声なき声」の『たより』に『市民』でなく『人民』を」という文章を書かれ、それに対して高島さんが『市民』の視角とアナキズム』と言う文章を書いた（三一書房『アナキズムと現代』に収録されている）僕は高島さんの主張に文句なしに賛成です。…… 神奈川（KK）



技術労働者として

「なぜウリ△WRI△Vか」は経験を下地にした説得力のある論文として僕の胸をつき抜けます。というのは、私は工業高校を出て、独占企業のなかの技術屋とも賃金奴隷ともつかぬところで、いわゆる労働力を提供している一人であるからです。

△私たちのベトナム反戦運動が、あれほど大きく盛りあがったにもかかわらず、日本政府の態度をついに変えることができなかったということの一つの主な理由は、このように戦争に対して、運動（組織）と個人が背反隔離していたことにある。△この文章の△反運動を他に置きかえてみます。反公害、住民、運動、

戦争に対してを体制や地方自治体としてみます。それぞれにあてはまるからです。私の周囲にも経営を離れ地域へ住居へ流れ出る労組活動家はさまざまにいます。そして、△という一人の人間がいます。彼は企業のなかでは知らぬ顔で機構の一部となり、家に帰ると地域の住民運動に熱心に参加したり、自治会の役員をやったりしているという多面性と、現状の繁栄という風景のなかでは笑っていられないものを持っているように思います。いわゆる、本音とたてまえ社会をシンボリックなものとしていると思うからです。

非暴力直接行動とは真に暴力の姿を可視、不可視に関わらず見据えたときのみにひとりの人間の自我の発露として出てくるものだろうという

ことは解ります。觀念的には私の中でひとつの予見としてあります。

シモーヌに出会った時は強烈でした。ヨーロッパ的風土のなかで根ざした労働と幸福というとき、果して日本にこのアフォリズムがあてはまるのかという危惧が最近してきました。それはヨーロッパ的ギルド制賃金配分と、日本型出稼ぎ賃金配分と

を比較してみても、日本の場合は根底には農が必らず出てくるからです。古来から農民の持ってきた土地の所有、非所有の相互の狭間で起る畦也せり、この土着的心情が、我近代的といわれる現代の企業や、組織のなかに残り得る以上、労働工程の中やその他での人格を变革する、つまり自我の改造をつちかわねばならない自己の組織化しかあり得ない。労働

工程を所有できない労働者階級（ほとんど絶望していますが）が連帯できるのは技能や技術における人格でしか我々には財産としないからです。農から離れたうかれびと達が、（まぎれもないその一人ですが）どのあたりで体制のなかへ組みこまれて行ったのか、勉強しなおしているところです。

現代の労働という実態をつかもうとすればするほど絶望という言葉しかありません。しかしながらそれもあるが、何かの雲のかけらがその裏側にこびりついているから、そのテーマ主義から離れられないのかもしれない。何もかもアフォリズムと超えることのできないいらだたしさがあります。

神奈川（K・Y）

ぼくなりの感想

私の非暴力—おわりの方の部分で『人々が大昔から共同してくらしてきた、そのくらし方の中にある眼に見えない力を「力」として取り出す』こと、その意識化からはじまると前に書いたが、それは同時に自分自身の内にある力を自覚することでもある。』というあたり、もっと聞きたいなという気がする。

ぼくは、なかなか「権力と闘う勇氣を持つことができるのではないか」という風にはつながりにくいのですが、僕なりによくわかる気がします。僕の場合、すぐに自分でいい気持ちになっちゃって、いわゆる「疑似平和的な小状況」の中で自足するとい

うところがあるのでしよう。……

奈良 (K T)

位置付け

……みたいな視点を

……水田さんの「私の非暴力」は難しすぎる。ゆとりがないというか、批判したくともそんなふん囲気ではない感じ。人間「革命」のために生れてきたんじゃない、みたいな視点がもっとあっていいと思います。

既製の左翼運動をもう少し風通し良くすることが、非暴力直接行動のもう一つの任務であるような気がするのですが。

東京 (S M)



……非暴力直接行動は、暴力を本質とする、すぐれて人民的な闘争形態だと思っています。

それは権力―暴力を解体して人民の手に取りもどし、尚かつ新しい権力を発生させないための政治的訓練として日常的な闘いにおける非暴力直接行動の意味があると思います。

(こういう位置づけは、WRIとしてはまずいですか。)

愛知 (I A)

賛意と疑問

僕は「戦争抵抗者」という名称は好きだ。おそらく戦争があった時、

僕は戦争抵抗者になるだろう。反戦厭戦、利敵行為、このような名称で名づけられるものが僕の戦時の行動となるだろう。僕には他人に自分の意志や生命をゆだねるようなことはできない。だけどウリは非暴力といっている。僕はだからウリに加わる気は今の所ない。自分のことはできるだけ自分でやるけれど自分の暴力をまったく使用することがない、など僕には宣言できない。

というより、暴力を用いてですら何らかの行為をしたいと思う時が僕には時々ある。サポタージュは戦術かもしれないが一人のサポタージュなど多数の隷従の前ではあまり意味をなさない。だから僕は自分の暴力を否定できない。暴力によって僕自身屈服させられる事態が起きるかも

しないが、その反動としての非暴力などまっぴらいやだ。

僕は横着で小心で怠惰だから直接行動なんかほとんど何もできないだろうし、その意味では戦争抵抗者にもなれないかもしれない。でもウリの何らかの行為には賛意を表わすことはできると思う。

東京 (Y H)

反権力を指向するものは 全て仲間である

僕としてはWRIの主意はよく判りますが、形式、教条主義は最もきらうところですので、全面的参加の確約はできません。

今までのアナキスト活動にしても何にしても、僕から見ればまだリベラルにすぎると思うのであります。

権力をたおそうとする奴の全ては

僕の味方であり、それ以外の連中は敵なので、手筋によってあれは正当、これは不当などとはせず、反権力の指向性あるものを全てを味方とし協力し、共闘する方針を変更しません。要は、可能な限り急速な権力の解体なのだから、僕は革命のためには手段は問題にしないのです。

たと僕自身のとる手段は、僕の好みの問題ですから、常時離合集散の可能な事が必要条件なのです。

(O A)

創刊号のみよく

水田さんのものは、論議の好材料を提供してくれていて、私も近くの人と話合ってみたい気になりました。

た。

向井兄の文は活動者の背景を浮きぼりにしている点で感銘を深く受け、自由連合Vの意味を今まで以上に明瞭にした、と思います。

東京 (I S)

向井氏へ

内容はどういき目に見ても「向井孝十その周辺の群小のてあい」が書いたものである。即ち、水田さん等が書かれている文章は向井イズムの垂流でしかない。もう少し向井さんの暴力論から別の側面を引き出せなかったものか。それがとりもなおさず「私の非暴力」になると思うのですが。

私がいまだにWRIのメンバーに

なれないのは、やはり「いかなる戦争も支持しない」という所がひっかかっているのです。向井さんはシモーン・ペーユのことを引用していますね。そのことばはなるほど私をひきつけつにはおきません。しかし：と私は考えるのです。ペーユはスペイン戦争に志願し、実際の戦争を、つまり地獄をのぞいてきています。富村順一の手記を最近読みました。彼も多くの沖繩の女達が犯されるのを眼のあたりにし、「戦争は悲しい：」と書いています。これらの先人の著述を前にしても、私はやはりためらわずにはおれません。私は地獄を実際に見たこともないので、そのような私が全ての戦争を拒否しうるほどの思想を体得しているとはとうてい考えられないのです。

「現代暴力論ノート」この間から読み返しております。とぼし読みです。から間違っているかもしれない。「疑似暴力としての反暴力」を認めておられますね。そのこと、「どのような戦争も：」とはどうつながるのでしょうか。そのような暴力が求心的に生産労働に向いていさえすれば認められるのであれば、そのことと「どのような戦争も：」とどう関わるのでしょうか。

第二信

「向井孝とその周辺の群小の手あいの事、なぜ「向井イズムの垂流」というかといえ、水田さんの文でも、その論拠となる所——一番かんじんな所——は「暴力論ノート」を引用して、お茶をにごしているにすぎま

せん。たしかに、今の僕らは向井さんの暴力論を越えることはできませんが、人の論文を読んでふむふむと納得し、あたかも彼の弟子のようにその文章を引用してすまず、などという態度は僕にはとれません。

ただ水田さんと同じく模索している者である僕は、できれば「暴力論」を読んで、それに納得するのではなく、そこから自らのものをひき出すために抵抗していく、批判していく、欠落している所を見抜く、別の側面から見てみる……そういう態度をとり続けていきたいと思っています。

卑俗経験主義—感覚主義の事

先日、神戸の連中がスペイン革命についての学習会をやったそうです。そのレジュメをもらいました。時を

同じくして、H M エンツェンスベルガーの「スペインの短い夏」を読了しました。いわゆるスペイン革命とドウルテイ軍団の事を書いた反小説（多数のインタビューと解説でつづっていくという形式のもの）です。そこに書かれてあるいくつかの事は、僕に深刻なショックを与えています。

例えば「無規律の組織化」（当時のCNT FAIのスローガン）では、とうてい聞えなかった事。つまり、本質的にアナキストは近代戦（前線戦・陣地戦）を闘うことはできないという事。権力の問題——現実的政治状況の中では無権力は、無力に等しかったこと。書き出せばいくらでもあります。

そのことと、これからの日本の状況はますます悪くなる、ひょっとするとクーデターも間近いのではないか、という危機感が、僕にWRIの「いかなる戦争にも……」にひっかかるのです。

等々いくらでも疑問はつきません。これが観念的、感覚的疑問でしょうか。深刻な事大主義でしょうか。いずれにしても、僕の今考えている事と、WRIはまだまだ離れていて、とてもいっしょになれるような性質のものではないのです。僕は僕なりのスタイルとやり方でそれだけにしか今のところいえません。

兵庫（O・J）



ハンガリーから

日本人はなんて、へりくだった民族だろう。（書きだしは少し突飛です）

日本にいる外人に対しては極力、英語をつかおうとし、道をきかれたら、英語ができなくて申し訳ないという気持すらもつ。こゝハンガリー（マジャールと自分達ではいう）では、外人に対する言語の配慮は全くありません。誰であろうと、わろろが、わかるまいが、マジャールを早口でまくしたてます。わかつて当然というよりも、他にしゃべる言葉がないせいもありますが、なんと言語ナショナリズムの強い国でしょう。

しかし僕の経験から云えば、たと

えどこの国の言葉でも、そこに六ヶ月位住んで、はじめに本気で言葉を習得しようとすれば、十分、日常生活はできます。

つまり、日常的に言葉を使い聞くことが大きな条件だと思います。だから、エスベラントに対する興味も、又やろうという気も余りなかったのです。やはり、日常的に必要、又不可欠でないからです。人と（外人と）コミュニケーションする気になれば、六ヶ月位でできるという意識から、エスベラントは問題にしていなかったのです。

ところが直接行動創刊号を読んで、エスベラントにそんな歴史があったとはつゆ知らず、少し考えなおしました。

こゝマジャールでは、小学校から

中、高校と十二年間ロシア語をやらなくてはならない義務があります。それは明らかに、言語帝国主義で、英語がなくても、ロシア語のないことはありません。

さて、こゝマジャールでの年間行事予定をみてみますと、八月に「国際エスベラント集会」というのがあります。またエスベラントの夏期講習、春、冬とよく開かれているようです。

もし許るされば、出てみたいのと今思っています。：

ハンガリー（S・Y）

近況報告

現在の私の職場は、私達六人の首切り問題の控訴審と合せて、近ごろ

の不況を理由に一四〇名を越える希望退職という名の首切りをやり抜き、加えて現行の労働条件の切下げを労組に逆提案して来ている現状です。

労働条件切下げの内容は現行七時間労働を三十分延長、深夜手当の五割増しを三割に、残業手当の三割を二割五分にそれぞれ切下げるという内容です。

このような提案が現在私の職場だけでなく木材の職場に働く者の共通の課題として、おおいかぶさっています。こういう中で、私の役目は、解雇後、県下の各労組に財制対策を目的に廻り歩いて、職場からずっと切離されている毎日なので、五名の解雇者ともに一日も早く職場にもどりたいものだと思います。

愛知 (O・S)

汚損切手?

今日、朝寝していると、郵便局から二人(一人は郵便課長)やって来ました。私の出した封筒四通を持っていて「切手の上にノリがぬってありスタンプが消えてしまうのでダメだ。これは汚損切手になる」とつつ返えされました。

私の方はそのまゝ、「ああそうですか」と受け取っただけです。

本当に汚損切手になるのだろうか。現在ぼく達は一ヶ月郵送は一五〇ぐらいで、ノリをぬる率は、ほとんどのですが、いっぺんにドサッと出したのが目立ったのかなあと思っています。

郵便局がやって来た事で、機械的

にやっていた「合言葉の意味」に、すごく実感が出て来ました。

石川 (H・H)

創刊号を手伝って

私自身、一冊の本がどのように出来上がったのか知りたいこともあって、直接行動創刊号づくりを手伝ったけれども、それは想像以上に大変なことでビックリしてしまいました。

発刊と発送終了の祝いの夜、一杯のんで、泣きながらうたった向井さんのとおきおきの歌、それを受けて歌うふうさんの歌。今も心の奥深くしみ込んでいます。そんなスタイルが全国から送られてくる手紙の一つ一つに通じってほしい。

つたわるのだと思います。それは心をこめ、時間をかけて相手に身をよせて書く、本をつくるということにつながっているのかなあと思っています。

W R I 事務所に居た数週間にいろんなことを発見できました。

兵庫 (T・R)

英訳合言葉

直接行動にのった「合言葉の意味」を翻訳。次号の英文リペーロにのせようと思っています。

兵庫 (L・M)

性の自治管理

△何故 W R I か V は特に私の印象

に残りました。

どうして最近反戦が叫ばれなくなったのか。それは現象に対応した反戦であったからではないでしょうか。国家というものはバクニンが言う通り、どんな民主的な形態を取ろうが、プロレタリア国家と呼ぼうが、必然的に人民に敵対する存在でしかないでしょう。だから我々が反戦の声を上げる基盤は、まさに国家が存在するからであると思います。それは戦争を引き起こす元凶である国家権力の否定を視野に入れたものと思います。そこでまたあたり前の事ながら、反戦と反国家は結合しなければ意味をなさない事であると思います。

つぎに「男たちは正義とか反戦とか、又は大勢に従って国に殉ずるの

ではなく、ただ一図に女にこそ殉ずる」という、ここにもまた、いや最大に重要な提起があると思います。性を管理して支配を貫徹してきたのが支配の論理であると呼ば、まさに性の国家支配に対する反逆、性の自治管理であると思います。労働の—資本・社会両主義国家権力に対する—反逆が、労働者の自治管理であるように、性の自治管理がこれに対応してこそ解放へと連なるのだと思います。国家権力に反逆を続ける力を維持するカギを握るのが、まさに女に殉ずる—これに徹しきれるかどうかで決まると思います。

国家権力がなに故に、性を抑圧するのかという問題に於いても、それは従来道德という事で済まされてきたけれど、その本当の意味は人民を

支配する上で最も適したものがまさに性の国家支配にあったのではないのでしょうか。

最近では資本主義社会に於いて、性の解放と言う事が言われてきて風俗化してきているようですが、自由があるように見えながら、実際には賃金奴隷として資本―国家権力に支配されているのと同じように、性の解放という風潮も、性の商品化へという支配の道具に陥し入れられる危険性が充分にあると思います。だから反戦とは単に戦争が起っているから反対するのではなく、それは国家権力の支配に対して反逆し、賃金奴隷の身分から人間としての権利の回復の為の反逆であるし、また性の商品化に対して性の自治管理の為の反逆、一言でいえば、人間性を否定する国

家権力に対して、人間として生きる為の反逆こそ反戦の原点であると思います。

大阪(Y・F)

提 案

以下きわめて私的な「非暴力直接行動V」に関する一つの考えです。デイスカッションの題材として批判して頂きたいと思います。

この一年間、WRIニュースその他で、「非暴力直接行動」に関する文章を読んできましたが――

A 非暴力直接行動によって、国家権力という暴力(もしくは暴力組織)を廃する(ないしは、それと闘う)ことができるか?

B (Aとの関連において)非暴力とは何か?どこまでが暴力で、

どこからが非暴力なのか?暴力と非暴力とは、違う「内包」を持つように「定義」することはできるにしても、ではその「外延」(実例)を考えるとなるとそれらは連続的であり、どこに非暴力と暴力の境界線を引くことができるのか?――

という疑問が、同じ形で、あるいはさまざまに形を変えて、繰り返し繰り返し出されているように思います。ロッキード事件の「灰色高官」なるもののように(この場合、ほんとのシロがいるか疑わしいのですが)白から黒の間に少しずつ暗さの度合の違う灰色が、すぎ間なしに並んで、白から黒の間がなくなってしまふ、ということが、非暴力―暴力(の外延)の問題にもある、と言えましょ

う。

もちろん「非暴力とは何であり、暴力とは何であるか」ということは、理論的にも（すなわち「内包」的に）しっかりと定義されなければならない。そのための努力が続けられなければならないでしょう。

けれども、それと同時に次のような「直接『行動』」なら「出来る」でしょうし、また「しなければならぬ」のではないのでしょうか？（われわれがしようとしていることは、「非暴力」ではなくて（「非暴力をする」では、第一意味をなしません）「非暴力―直接行動」なので、「行動」が無ければ意味が無いのです）それは、普通の常識のある人が、マジメに、論理的に考えたとき、その大多数によって、異論なく「非暴

力行動」と認められるものを列挙する。（ぼくは、サラリーマンだった

ころ、市場調査・世論調査・アンケート取り、の仕事をしていたので、こういうやり方は大いに現実性を持つものとして考えられるのです。）

角材なし、投石なしのデモ（自動車をつひっくりかえして火をつけるということもしない）などは、先ずこれに入るでしょう。

鈴木さん虐殺糾弾の手紙を大拘職員家族宛てに出すのも同様。

それらを「非暴力直接行動―1」とします。そのリストを見れば、そのリストを作る時、思いつかれなかった事で、『あれが非暴力直接行動―1』に入るなら、これだって当然そこに入ったってよいじゃないか』というものが出てくるはずですよ。

そのリストを作って「非暴力直接行動―1」とします。

（「非暴力直接行動―2」は、1や2よりも、もう一歩だけ暴力寄りの一群の直接行動です。）

こうして出来た「非暴力直接行動―1&2」のリストは、結構長い（多くの項目）ものとなるはずですよ。

次の問題は、①それらを「することによって何が達成できるか？

②それらが、どれだけ実行されてきているか？

③過去において実行されたけれども、達成したことがわずかなものがあったら、その「やり方」はどうだったか？をそれらのアイテムのそれぞれについて検討することです。そうすると、ずいぶん多くのことを達成しうるさまざまな非暴力直接

行動があまり実行されずに、放っておかれて来ていることが分かるのではないだろうか。

それらのなかから『最も必要とする効果』を達成できそうなものを選んで、それをどんどん実行に移していく、というのが、非暴力直接行動として、議論よりもずっと大事なのではないだろうか？

「外延」を考えずに「内包」だけを論じるのは——実行なしに空論に耽る——のは、「地に足がつかない」「うわついた」行き方——生き方でしかないでしょう。

「今」「先ず」何をなすべきかなされるべくして、なされていない事がどれだけあるか？

非暴力直接行動によって拓かれるべき荒野——広野が、われわれの眼

前に広がっているでしょう。

神奈川 江川允通

テンノウの弔電

北京周報二九号を見ていたら、朱徳同志逝去に対し、カシコクモ天皇陛下より弔電があったとの事。これはどういう事でしょうか。私は余り新聞を見ないので初耳でした。色々な事があるのですね。

東京 (N・Y)

出会い

はじめ本屋の店頭で七百元という定価にいきさかためらってぼくは、

いまは運命的とも思える「直接行動」創刊号との出会いを、あやうくとり

逃すところでした。一冊の雑誌が、このように自分をうごかし、具体的行為へと誘うものであることを、ぼくはいままで全く知らなかった。ひとつひとつの論文を三どくりかえして読み、ぼくが得た勇氣のようなものに對して、そう断言できます。

△合言葉の意味Vの実践は、僕に新しい世界へと導くものでした。その快感は、新世界社会に足をふみ入れた者のみのものでしょう。今まで全く関心のなかった「非暴力直接行動」はいま僕のなかで新鮮な胎動を伝えだしました。……七百元は何千円であっても、僕は高いとおもいません。

兵庫 (M・R)

